

事例番号 140 スモール・イズ・ビューティフルのまちづくり(熊本県小国町)

1. 背景

小国町は熊本県の北東端、大分県との県境に位置する人口約9,200人のまちである。阿蘇外輪山の外側にあり、九州第一の大河筑後川の最上流にある小国盆地がまちの中心地である。周囲は森林であり、江戸時代から小国杉の製材を生業としている。また、現在では野菜栽培や酪農も行われている。「小国」の名のおこりは、神話時代に、阿蘇神社の祭神が放った矢が落ちた御矢の原(現在の大字宮原)に住む大河片澄が「臣が国小なりと雖も青山四方を巡りて住吉の国なり」と語ったことにあると言われている。

小国町を含む小国郷は1890年(明治3年)に旧25ヶ村が合併して9ヶ村になり、1989年(明治22年)に北小国村(6ヶ村)と南小国村(3ヶ村)とに分かれた。その北小国村が人口(11,000人余り)の多さから昭和10年に小国町となった。このような経緯から現在の小国町は6地区(大字)に分かれている。中心にあるのが宮原(みやばる)で、その周囲に西から時計回りに黒淵、下城、西里、北里、上田の5地区がある(南側は南小国町)。下城は杖立温泉がある地区であり、北里は北里柴三郎が生まれ育った地区である。

小国町の林業は昭和30~40年代までは盛んであったが、その後は国産材の需要不振の影響で衰退に向かった。また小国町随一の観光地であった杖立温泉は、昭和40年代は炭鉱で働く人々が福岡等から大勢やって来て大層賑わったが、いまや時代の変化の中で衰退の度合いを強めている(以前は宮原に飲み屋が少なく、みな杖立まで飲みに行っていたが、今は宮原で飲んでしまうので、その影響もある)。

消費の外部流出も経済の低迷に大きく影響している。消費は以前から福岡市、熊本市等に流出する傾向があったが、最近では熊本市の手前にいくつも出来た大きなショッピングセンターに向かうようになっている。消費が既存のまちの外に向かう傾向は、道路がよくなればなるほど強まってきたと地元では認識されているが、そのモータリゼーションの進展のために国鉄宮原線が1984年に廃止され、小国町は鉄道のないまちになってしまった。

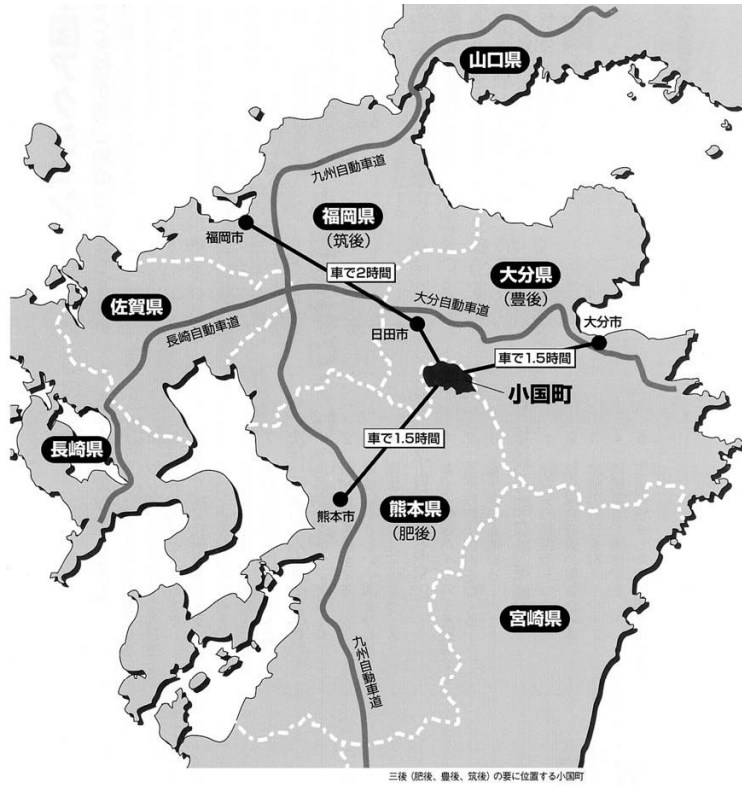
このような経済状態の下で、町の財政問題が深刻になっている。特にここ数年では地方交付税交付金の削減が大きく影響しているという(小国町の場合は補助金カットの影響はさほどなかった)。小国町の中心街は狭い盆地につくられたものであるため、3年に一度くらいの頻度で発生する杖立川の氾濫による被害を被っており、その財政負担も小さくない。

以上のような経済的衰退を背景に人口も減少傾向をたどり、まちには将来を悲観視する雰囲気広がってきた。このような状況を打開すべく、小国町では1980年代半ば以降まち再生のためのさまざまな施策が講じられてきた。その主な戦略は、人の交流拠点の整備、地域資源の有効活用、地場産業の再活性化、人の育成等である。

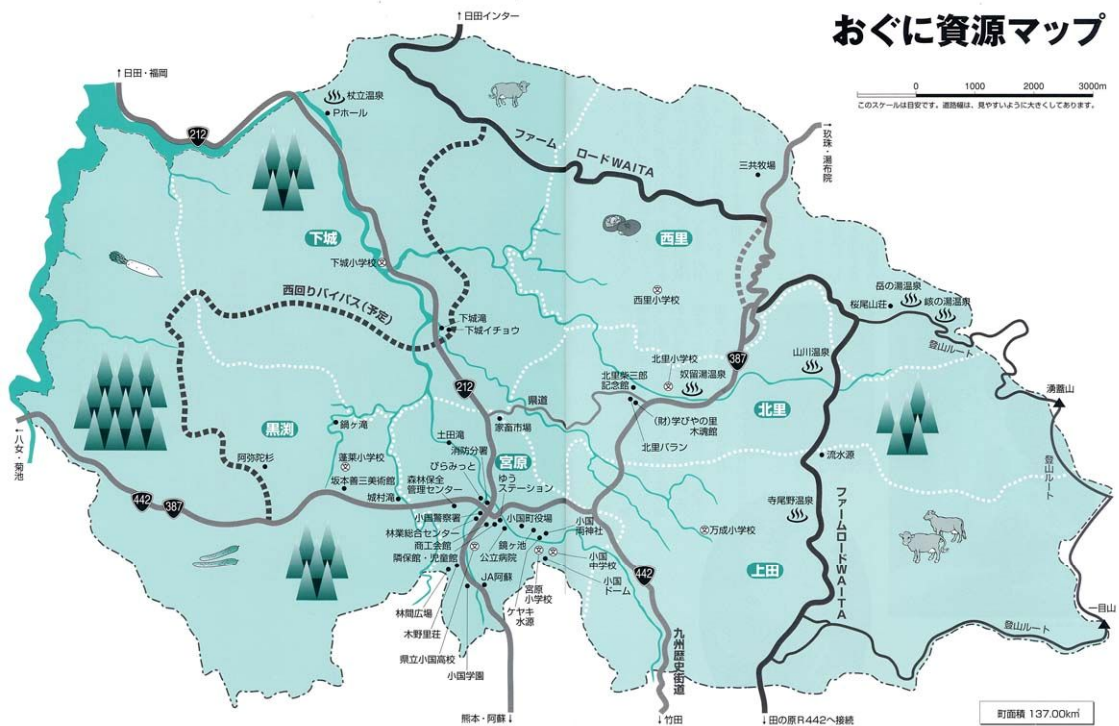
2. 目標

小国町のまちづくりは、行政の総合計画よりも町が独自に定めた「シナリオ」に拠っている。総合計画は「行政上の整合性や形式を重視するため、事業を羅列する行政計画にならざるを得ない」が、「シナリオ」は「町民と行政が行動をともにするうえでの指針となるような内容や叙述をこころがけ

ているので、多くの町民や行政にとって拠り所として活用しやすい」ということである(小国町『小国 21 世紀シナリオ』(2001 年)から引用)。



小国町の位置 (資料:小国町『小国 21 世紀シナリオ』2001 年)



小国町の 6 つの大字 (資料:小国町『小国 21 世紀シナリオ』2001 年)

小国町ではじめてシナリオが作成されたのは1986年である。その第1次シナリオでは「悠木の里づくり」という目標が掲げられた(その方針自体は前年の町制施行50周年記念シンポジウム「おぐにみらい21 悠木の里づくりをめざして」で打ち出された)。「悠木」の「悠」には「悠久」、「悠然」という思いが込められていた。

続く第2次シナリオ(『小国ニューシナリオ91』)では、5つの「小国ポリシー」として、①「暮らしの視点」から豊かな小国をつくる、②人びとが選びとる地域をめざす、③「現場を大切に」して「変革をめざす」、④産業の「デザイン産業」化をはかる、⑤差別のない「開かれた地域」をめざす、を掲げた。

そして2001年に作成された第3次シナリオ(『小国21世紀シナリオ』)では、前回のシナリオの内容を継承しつつ、「小国ポリシー」を次の表現に改めた。

- ① スモール・イズ・ビューティフルのまちづくり
- ② 個人を大切にする開かれた地域をめざす
- ③ 広域化に備えて地域自治を強化する
- ④ 交流ビジネスで豊かな小国をつくる
- ⑤ 地域経営の要となる動的役場をめざす

①は、「地元にある豊かな自然や環境、文化、あるいは特産品や人のつながりなどを、小国のかげがえのない「地域資源」として捉え、磨き上げ、町民にとっても、来訪者にとっても魅力あるまちをつくるということである。②は、「これからは、組織によって人が動かされるのではなく、人が組織を動かす仕組み」へ転換することが必要であり、「個人の自主性を尊重した活動とそのネットワークを基本にして、まちづく活動を展開」するということである。③は、広域化するこれからの社会においては「必要以上の干渉をさけながら、いざという時には適切に助けあえる、新しいコミュニティのあり方」が求められ、その根幹には「自立する個人を大切にする視点」が欠かせないという認識から、「住民と行政が対等の立場に立つ、いわゆるパートナーシップの関係」を育成するということである。④は、小さなまちが生活を維持していくためには「交流人口」を増やすこと、「交流ビジネス」を起こすことが必要との認識から、特に専門的な技能や知識を持った人材との交流を促進するということである。⑤は、「町民の声を聞き、町民とともに考え、歩む役場」「行政情報を町民と共有する役場」「行政評価を行い、絶えず自己革新を進める役場」を目指すということである。

3. 取り組みの体制

小国町の6つの大字はそれぞれ「大字協議会」を持っている。これは町から補助金等が一切ない住民の自主的な組織である(ちなみに、行政は大字一部、二部などという部の組織を作っているが、これは集落をいくつかまとめて部にしたものである)。この「大字協議会」が今でも地域づくりの中心組織である。

この大字協議会それぞれに1991年、住民有志から成る「土地利用チーム」が発足した(町役場の発案により発足し、役場職員がそれぞれ何人か担当してサポートしている)。1980年代後半からのリゾートブームで問題になっていた乱開発が小国町でも懸念されるようになったからである。しかし議論の過程で、各地区の生活のあり方と土地利用のあり方とは密接不可分であること、住民相互

間の意思疎通をよくすることがまずは大切であることが認識され、チームはほどなく「コミュニティプラン推進チーム」(通称「コミプラ」)に改称されて現在に至っている。

「コミプラ」の活動状況は地域により異なるが(下水道計画づくり、川掃除、広報誌発行、イベント等)、おおむね地域に根付いた組織になっている。かつては町が補助金を出していたが(1 チーム 50 万円)、段階的に減らし、2004 年度以降はゼロになっている。

「コミプラ」は発足から既に約 15 年が経過し、活動や提案内容の熟度は大字によりかなり異なってきたが、まちづくりの担い手を新たに発掘するという大きな成果を残している。現在では「コミプラ」がまちづくり活動の中心組織というわけでもなく、活動は傾向的には下火になりつつある(依然として活発なところがあるものの、ほとんど活動を停止しているところもある)。それは、メンバーが高齢化する一方、若い人が参加しなくなっているためである。

次の世代(20~30代)はIターン、Uターン組であり、彼らは別の組織で新しい活動を始めている。それらはイベント活動等であって、必ずしもまちづくり活動と言えるものではないが、公共的な活動もある。例えば、行政が防災目的で立ち上げた「FM おぐに」を引き継ぐ形で設立された第3セクター「株式会社 FM おぐに」は若い人が担っている。それは今でも防災活動をやっているため町が金を出している。

まちづくり活動には農協(生産部会)、森林組合、婦人部、観光協会等も積極的に関わっている。それら全体をとりまとめてまちづくり全体をみる仕組みはない。

地縁的には、消防団、老人会、婦人会の3つの組織が大きな存在である。消防団には行政の金が入っている。老人会、婦人会にも行政から少し金が出ている。後二者には大字協議会からも金が出ている。

4. 具体策

(1) 建築群の整備

「悠木の里づくり」は、地元の資源である木の可能性を広げ、「悠々と木づくりをしていこう」という趣旨であったが、それを契機に、それまでは守りの姿勢であった林業に、木材という資源を新しい視点で再活用していく必要があるという考えが出てきた。そして、そのためには町内で固まっていたはだめだという意識が出てきた。

そのような思いをはじめて目に見える形で表現したのが「ゆうステーション」である。これは廃線になった鉄道駅跡地にバス交通センターとしてつくられた建築である(1987 年竣工)。その形は円錐を逆さまにして地面に突き刺したようなユニークなもので、外壁は黒の総ガラス張りである。立体トラス構法という構法によるものであるが、その立体トラスを小国杉を用いて木造で造ったところがこの建築の一大特徴である。それは杉角材を特殊なポールジョイントで三角形に組み合わせていくという日本初の木造立体トラス構法であった。

木造立体トラスは建築基準法の想定外のものであったので大議論になったが、小国では乾燥技術などを高度化させて木材の耐久力の確保を図ったので、小国の森林組合が関わったものであればよいということになった。そして、この建築施行は地場の業者が行ったので、彼らにも高度なノウハウが身に付いた。さらに、小国杉の新たな活用策を見出して独特の建築を実現したことが人を呼ぶ大きな力にもなった。

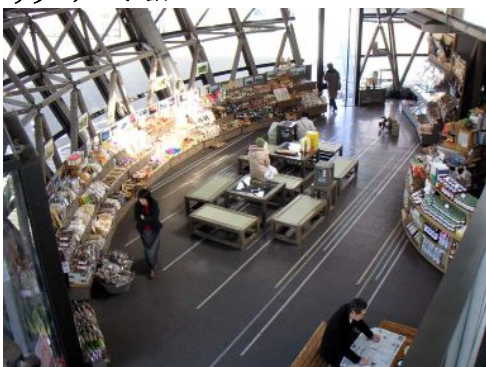
このように、「ゆうステーション」の建設は、地元資源の有効利用、地場産業の高度化、内外の交流の創出という多面的な効果をもたらしたが、その建築を設計したのは葉祥栄氏(熊本県出身)であった。新しいデザインを町にもたらししてくれる人物を捜していた町長の宮崎暢俊氏が建築雑誌で葉氏の建築を眼にし、自ら葉氏に電話したことから、葉氏による設計が実現した。

「ゆうステーション」のバスの発着所は建物の外にあり、建物の内部は1階が休憩所及び特産品の販売所、2階が町民ギャラリー及びツーリズム協会の事務局になっている。

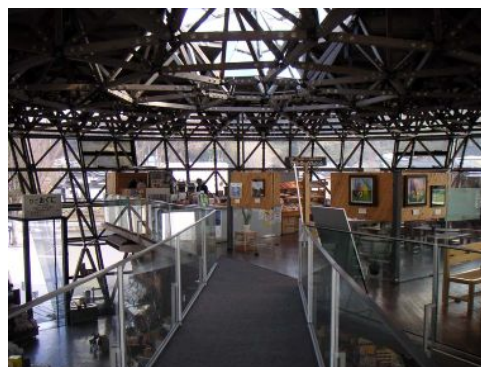
小国町では「ゆうステーション」に続いて「ぴらみっと」(物産館・レストラン、1988年)、「小国ドーム」(アリーナ、1988年)、「木魂館」(研修宿泊施設、1988年)、「パラソルセンター」(隣保館・児童館、1995年)など小国杉を活用した数々の特異な建築を行ったが、それが小国町の知名度を全国的に高め、内外の大きな交流を生み出す原動力となった。また、地場産業の振興にも大いに寄与した。特に、小国ドームでは屋根にステンレスの板金を用いたが、それは北海道からプロを呼んで作ったため、そのノウハウも手に入った。これらの建築を契機に、1986年、第3セクター「悠木産業株式会社」が設立され、林業振興にあたっている。



ゆうステーション



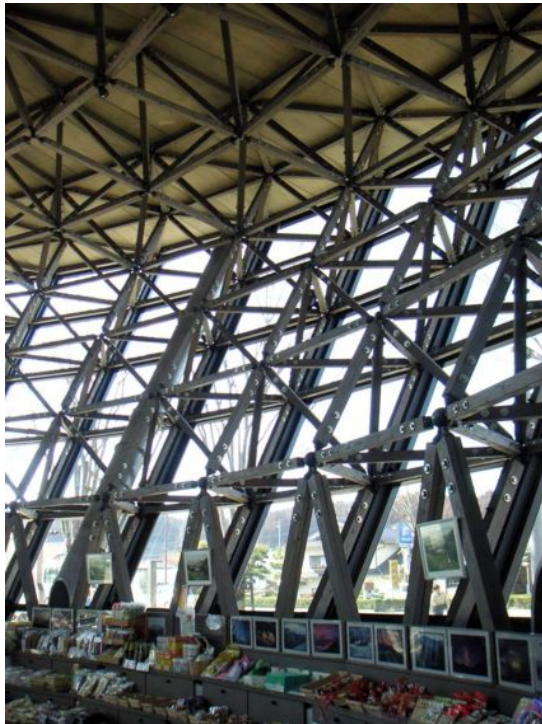
ゆうステーション 1階



ゆうステーション 2階



ぴらみと



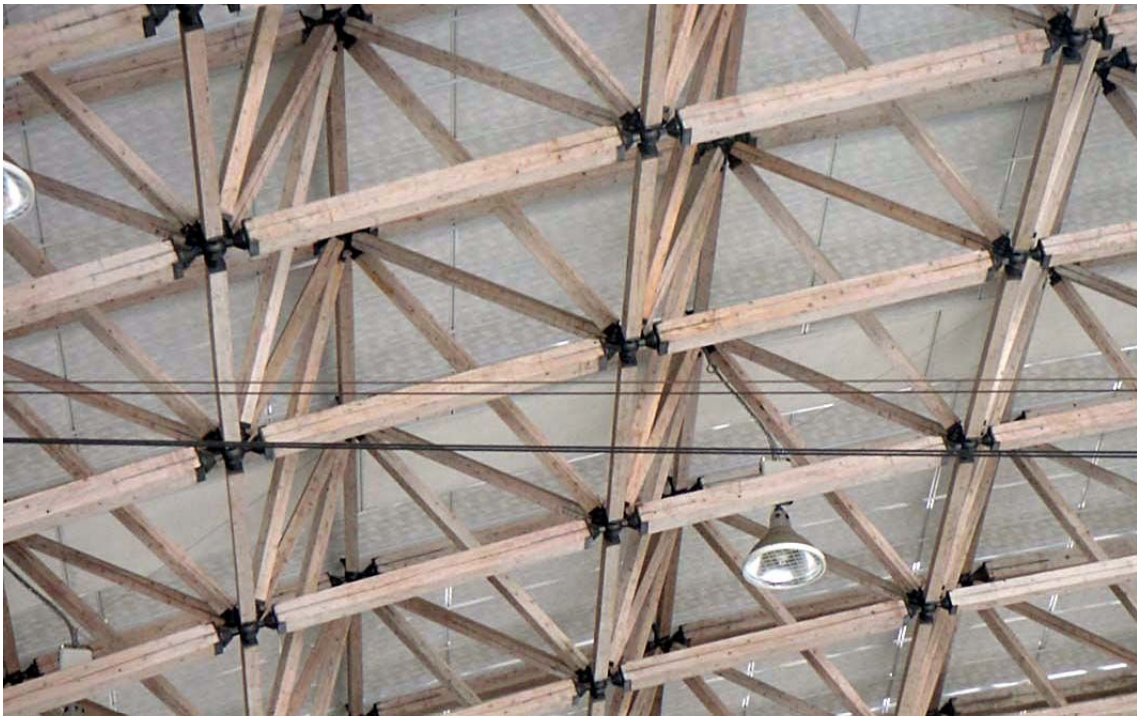
ゆうステーション内部



ぴらみと内部



小国ドーム



小国ドームのトラス



パラソルセンター

(2) 住民主体のまちづくりの促進

さまざまな試みを通じて、まちづくりにおける地域住民の主体性が高まってきた。「コミプラ」の議論は当初は土地利用に関するものであったが、議論の過程で視野がまちづくり全体に広がった。そしてその議論について、中心人物であった江藤訓重氏が「人さまの土地に勝手に夢を描く」というキャッチフレーズを考案し、それに基づいて皆で開発プランを話し合った結果が、1996年の「みんなで考えみんなでつくる小国まちづくり条例」の制定につながった(大字協議会の協議員が審議会をつくって審議)。この条例は地域住民の力で優れた景観を創り出すことを目的に制定されたものであるが、それにより町外の開発業者に対する一定の抑制効果が出ている。

一方、小国町のまちづくりを総合計画ではなくわかりやすい「シナリオ」に基づいて実施してきたことは人びとのまちづくりへの関心を高める上で大きな効果を発揮してきたが、第3次シナリオの作成にあたっては、行政職員と協働する住民側の代表として、「町民策定チーム」が結成された(1999年)。メンバーの多くは「コミプラ」のメンバーであったが、町民自身が自ら町民アンケートを実施し、その報告会も自主的に企画運営した。また、大字別に「わいわい懇」が開催されたが、その企画運営も主に「コミプラ」のメンバーが担った。シナリオ作成の過程では、異業種の若手が集まった「ヤング・イノベータ会議」も開催された。

「コミプラ」の活動は大字によってかなり熟度が異なるが、いくつかの地区では活発な活動が行われている。黒淵地区の鍋ヶ滝では地区の人びとが周辺整備を行い、最近注目を集めている。下城地区(杖立温泉がある地区)では、地区の人びとが地域資源としてイチョウの大樹に着目した(下城のイチョウ、樹齢千年以上と推定される国の天然記念物)。そこで町もアクションプランを作り周辺整備を行っている。また、杖立では「健康の里づくり」をキャッチフレーズに、「薬膳、蒸湯、気功」を採り入れて杖立温泉をPRしている。小国町は中国河南省登封市と友好都市提携を結んでいるが、

「薬膳、蒸湯、気功」は登封市にある崇山少林寺のものを採り入れたものである。ちなみに、杖立では廃校になった小学校が少林武術の道場になっている。なお、下城地区では若い人中心に「杖立ラボ」を立ち上げている(ホームページあり)。



少林寺道場

(3) 人づくり

北里柴三郎は「地域のひとづくりには“学習”と“交流”が大切だ」と提唱したが、その精神が見直され、戦後閉じられていた「北里文庫」が再開されるとともに生家が北里柴三郎記念館として整備された。また、町民プランニングシステムから「学びやの里」構想が生まれた。これは、北里柴三郎記念館及び木魂館を中心とする一帯を公園とし、そこを小国町北里地区のコミュニティ活動拠点に、また町内外の人々の生涯学習の場にしようとするものである。その中核施設として建設されたのが宿泊型研修施設「木魂館」である。この建設は町民プランニングの中で決定されたものであり、役場の職員 2～3 人、地域住民 2～3 人及び専門家で具体的なプランを作った。地域住民の中では北里柴三郎にはじめに着目した江藤氏(後に「コミプラ」の中心人物になる)が重要な役割を果たした。設計はコンペで決定し、1988 年に開館した。

館長には江藤氏が就任し、宿泊に伴う食事等のサービスは地域の女性が組織した「ピッコロ・クッチーナ」が担った。その後、北里地区の各種施設を包括して地元の有志が運営する「財団法人 学びやの里」が設立され(ほとんど町の出資による)、木魂館はその財団の活動拠点のひとつとなった。

木魂館は館長はじめ小国町の人びとの個人的なネットワークを通じて全国の人が集まる場所となり、単なる研修施設ではなく交流施設としての役割を果たしている。また、全国から集まる視察者

や研究者も増え、交流ビジネスの拠点という性格も強めてきている。

同様に、黒淵地区に1995年に開設した坂本善三美術館も美術館の枠を超えて各種コミュニティ活動の場として機能している。このように、小国町ではまちづくりは人づくり・コミュニティづくりとの認識が根付いている。



木魂館（資料:「九州ツーリズム大学 大学案内」）

(4) ツーリズム

小国町のまちづくりの現在の中心的なキーワードがツーリズムである。小国町で「ツーリズム」と言う場合、それは単なる観光ではなく、内外の人びとの多様な「交流」や「連携」、更には新しい人の定住につながる「U・I ターン」等の意味も含まれる。また、地域の文化はツーリズムの資源や要因となるので、「文化」もツーリズムを構成する大事な要素であると考えられている。このような意味で、「ツーリズム」はこれからの小国のまちづくりを牽引する重要なキーワードとして捉えられている。

小国町におけるツーリズムのそもそものきっかけは、1996年に西日本新聞社が木魂館で開催した「九州ツーリズムシンポジウム」にある。その参加者の共通の悩みは「人材育成や実践的ノウハウを学ぶ場がない」ということであった。そこで、翌1997年、小国町が「九州ツーリズム大学」を立ち上げた。「財団法人学びやの里」が事務局になり、それまでの木魂館の活動で形成されたネットワークを通じて全国から講師を招き、木魂館を会場にして開講することとなった。

開講時期は毎年9月～3月で、学科はツーリズム学科、観光まちづくり学科、環境教育コースの3つが置かれている。6期までに916名の卒業生(本科生)と修了生(聴講生)を出した。

ツーリズムに関してはその他さまざまな取り組みを行っている。2005年度からは中学生の体験農業に取り組んでいる。2005年秋には2つの中学校から350人くらいを2泊3日で町内の農家が受け入れ、2～3人を一組にして畑や酪農の手伝いをする体験をしてもらった。「里泊まり」として地区の集会施設に泊まってもらうこともやり始めている。町では今後さまざまな体験を組み込んだツーリズムに取り組んでいく予定である。なお、大分県の安心院町(あじむまち)もツーリズムを熱心にやっており、年間3～4千人も受け入れている。

(5) その他の活動

以上のほか、小国町では特産品の開発、通称「ファームロード」(広域農道)の整備、「電子政府小国」をめざした光ファイバーの情報ネットワークの整備、「おぐにTMO」(1999年設立)による水や緑を生かした個性的な商店街づくり等、さまざまな施策が講じられてきている。

特産品の開発に関しては、酪農におけるジャージー牛の導入による乳製品の生産増、加工、流通への進出が特徴的であり、「びらみっと」をショーウインドーとして既に多くの人に親しまれている。特産品の開発にあたっては、場所の提供(1985年に加工試作施設「手づくりの館」を建設)と優秀な人材の育成(外からプロを呼んでノウハウを仕入れる)とが功を奏しており、この点は木造トラスや板金技術の開発に似たところがある。

5. 特徴的手法

地域の普通の施設を小国の木を使って特徴的な建築にした。これが極めて大きな特徴のひとつである。価値が見失われつつあった地域資源を新しい視点で再活性化し、地域資源の有効活用、地場産業の振興(ノウハウの高度化等)、地域社会活動の拠点形成、内外の人々の交流の活性化等多様な効果を小国町にもたらした。

建築群というハードを一気に作ったことも効果があった。それにより様々なイベントができるようになった。「コミプラ」の活動の場、内外の人びとの交流の場となり、それが今日のツーリズムというソフトにつながっている。

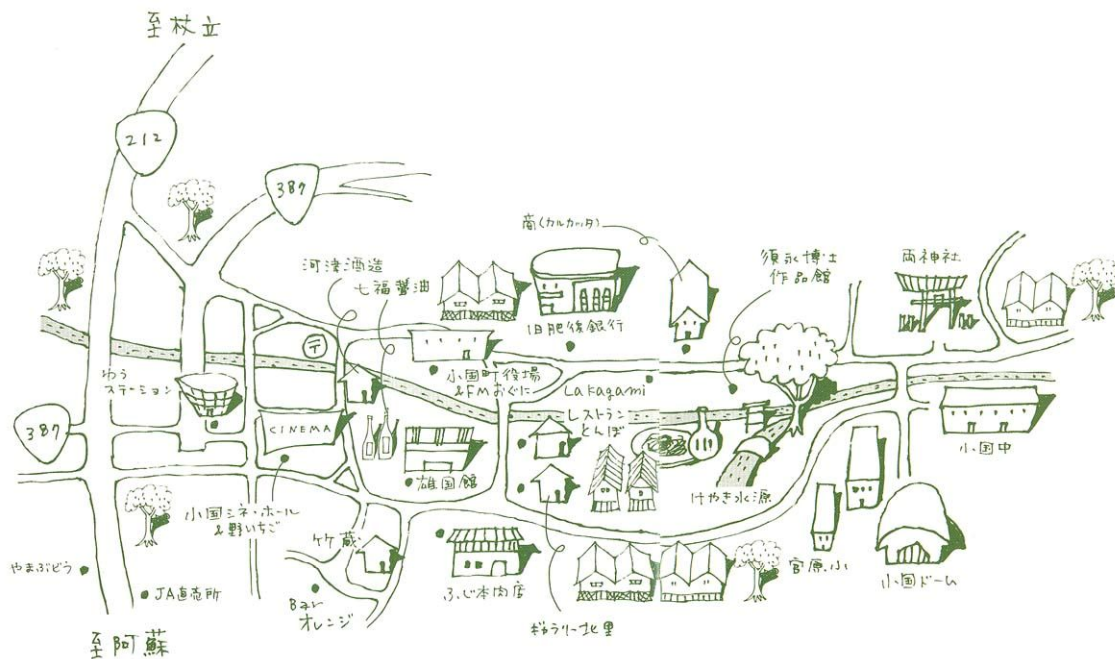
まちづくりをこのように積極的に展開できた背景には、人を育てようという小国町の気風がある。人を育てる包容力は、「地域全体がゆるやかというか、寛容じゃないとダメだよね」という宮崎町長の言葉にも表れている(小国町『小国遊学』)。小国町では国土交通省がインターン制度をはじめの前から木魂館に学生を受け入れており(年間5～6人)、そこで学んだ学生達は卒業後もイベント等の際に手伝いに来ている。人を引き付ける包容力が小国町のまちづくりの原動力となっている。

なお、小国町のまちづくりでは「洒落」もひとつの特徴である。例えば、「びらみっと」は以下の言葉に由来している。

Pyramid(ピラミッド) / Pillar-mid(心中の柱) / Pillow-meat(柔らかな肉)

6. 課題

財政制約が一番の課題である。下水道等のインフラ整備も必要になっているが、現段階では手が付けられない。建物の維持費も重荷になってきている。指定管理者制度を活用して民間委託も検討中である。



小国町中心部のイラストマップ (資料:小国町『小国遊学』)



小国町中心部 (西方からの眺め)

(参考・引用文献)

小国町ホームページ

小国町『小国 21 世紀シナリオ』2001 年

九州ツーリズム大学 大学案内

小国町『小国遊学』

八甫谷邦明『まちのマネジメントの現場から 自己変革するまちづくり組織』学芸出版社、2003 年

国土交通省総合政策局事業総括調整官室『自立型地域コミュニティへの道 人口減少に負けない豊かで元気な地域をつくる』ぎょうせい、2004 年

日本政策投資銀行地域企画チーム『錦おりなす自立する地域 9つの視点から見た 100 の地域振興プロジェクト』ぎょうせい、2002 年